

出題分析		
試験時間 90分	配点 75点	大問数 3題
分量 (昨年比較) [減少 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 増加 <input type="checkbox"/>	難易度変化 (昨年比較) [易化 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 難化 <input type="checkbox"/>	
<p>【概評】</p> <p>〈現代文〉</p> <p>第一問は例年同様、現代の評論（A）と文語文（B）の2つの文章からの出題であった。文章量はA・Bともに昨年と同程度だが、特にAは明治期の文体に関する専門的な内容であり読解は難しかったと思われる。第二問は頻出の芸術をテーマとしたエッセイであり、慣れていた受験生には取り組みやすかっただろう。本文の分量は昨年と同程度であった。</p> <p>〈現・古・漢融合問題〉</p> <p>第三問は例年同様、現代文・古文・漢文の融合問題であった。古文・漢文の引用を含む1つの評論文からの出題であった昨年度と異なり、今年度は、甲・乙・丙・丁の4つの文章および漢詩からの出題。4つの文章・漢詩を読み解く必要があるものの、昨年度に比べ本文総量が減少したため、全体的な難易度は昨年並みといえるだろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文 A 梅森直之「秋水の兆民、兆民の秋水」 B 幸徳秋水「翻訳の苦心」	Aは中江兆民が幸徳秋水に教えた、外国語の翻訳と漢籍の知識との関係について述べた文章であり、Bは秋水が翻訳の難しさについて述べた文章。設問数が昨年より2題増え、一部に出題意図がつかみづらいものが見られた。空欄補充1問、抜き出し1問、内容説明5問、生徒の会話を想定した空欄補充1問、文整序1問の構成。	やや難
二	現代文 畠山直哉「写真はイメージです」	イメージとは現実と表象の間に存在する無数の夢であり、そのひとつを確かなものにしたか豊かさを喜んだりすることが写真の仕事だと述べた文章。文章は読みやすく、設問も解答をしばらくこみやすい。空欄補充3問、文整序1問、内容説明1問、内容合致1問、漢字問題1問の構成。	やや易
三	現古漢融合 甲 倉本一宏『一条天皇』 乙 『続本朝往生伝』第一話	甲は、一条天皇とその治世が、後世の説話集において肯定的に描かれていることが多いと述べた文章。乙・丙は、藤原為時が越前守に任じられた経緯を記した文章。丁は、人生において少壮と栄華は必ずしも両立しえないことを嘆じた漢詩。	標準

設問別講評		
丙 『今昔物語集』巻二十四第三十話	各文章の趣旨を大まかにつかみつつ、設問に応じて細部の読解もこなしていく必要がある。空欄補充 2 問、内容説明 3 問、文学史 1 問、文法 1 問 (敬意の方向)、返り点 1 問、解釈 1 問、内容合致 1 問の構成。	
丁 白居易『白氏文集』巻第六十二「短歌行」		

合格のための学習法
<p>〈現代文〉</p> <p>例年、文語文を含む複数の文章の関係性を読み取らせる問題や古文・漢文との融合問題が出題されており、過去問演習が有効な対策となる。現代文・古文・漢文の同意箇所注意しながら読み解いていく練習を積むとよいだろう。また、複数の文章の関係性を問う問題は大学入学共通テストなどでも出題されているので、同一傾向の問題に取り組んでみることも有効である。</p> <p>〈古文〉</p> <p>まずは基本的な文法・単語の知識を身につける必要がある。その上で、さまざまな時代・ジャンルの文章を読み、文章読解に慣れておくこと。現代文や漢文との融合問題であっても、古文の設問は基本的な知識で解答できる場合が多いので、本番で取りこぼしのないよう、過去問等を活用して十分に対策しておきたい。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>句法や重要語句の知識をしっかりと身につけることが最も重要である。特に返り点や書き下し文の問題は、基本的な句法の知識が手がかかりになる場合が多い。また、過去問に取り組むことで、現代文・古文との融合問題に慣れ、まとまった量の文章を早く正確に読めるよう十分に演習を積んでおきたい。</p>